

福祉系 対人援助職養成の 現場から³⁷

西川 友理

保育学生の進路選択

「先生、私やっぱり、保育方面で就職したくないなあ。あんまり、魅力を感じないんです。」

「保育園、児童福祉施設、幼稚園と、実習も一通りやってみたけど、やっぱり合わないかも。何か違う。」

7月、短大2年生の学生が深刻な顔でやってきました。そして、

「でも今更、保育以外の現場に就職するなんて考えられないんです。」

と言いました。私は驚いて聞きます。

「今更、なの？卒業まで、まだ半年以上あるじゃないですか。」

と問いかけた私に、学生は言います。

「うーん、だって…わたし、保育以外の勉強をしてきていないもの。今更、どの分野

に行っても、遅いってば…。」

私が教員として経験したいくつかの保育士養成校では、

「子どもの現場に就職しないと、次にどうしたらいいかわからない。」

「子どもに関わる勉強しかしていないのに、今更何にもなれない。」

「学費を出してくれている親に、そんなこととても言えない。」

等という声をきいたことがあります。

専門職になるのが当たり前の文化

保育の勉強をしていたのだから、保育士としてしか就職できない、などということはもちろんありません。

確かに、専門学校や短期大学もその修学年限やカリキュラムの性質上、ほぼ職業教育を行う場として設定されており、その専門職を養成する学校に入学するということは、卒業後にその職業に就くことは当然であるとは考えられやすいでしょう。

厚生労働省雇用均等・児童家庭局の調査によると、2014年度末に保育士資格を取得して養成校を卒業する学生のうち、専門学校で約85%、短期大学で約86%が保育士として就職したようです。

また、日本介護福祉士養成施設協会の調査によると、2018年度末の介護福祉士養成校の卒業生は93.3%が介護現場に就職したとのことです。

社会福祉の専門職、特に介護福祉士や保育士など、いわゆるケアワークに関する福祉専門職を養成する専門学校や短期大学の学生は、卒業後に当該専門職として就職するのがほぼ当たり前だということが、データを見ても分かります。

そんな専門学校や短期大学で、卒業後に福祉専門職以外の仕事に就く、と表明した学生は、周囲の人々から、やはり一瞬「エッ」という顔で見られます。まず友達です。

「え、なんで？やめちゃうの？そしたらどうするの、卒業してから。」

そして教職員、

「もったいない、実習もしたでしょ、実習先の評価も悪くなかったじゃない。せっかく資格を取るんだから、資格を活かした仕事に就いたらいいのに。」

それから親兄弟。

「あんたが保育士になるって言ったから、学費払ってたのに！」

まるで、「卒業後、専門職にあらずんば人にあらず」とでも言わんばかりに周囲の人が詰め寄ってきます。

これらの声をおして、「いや、私は別の就職がしたい！」というのは、当該学生にとってけっこう大きな決心になってしまいます。

将来像が矮小化するプロセス

そこをおしても「保育士では就職しない！」と言っている学生には、自分の学んでいること以外の分野で、自分のやりたいことがはっきりと見えているケースが多いです。

「将来のために資格は取るが、仕事は〇〇がしたい」とか「まずは資格を活かした仕事に就き、5年くらい働いたら、それまでの貯金と経験をもとに改めて〇〇をしたい」とか「資格を欲しいと思っていたけど、それよりももっと専門的に〇〇について勉強したくなった！」など、資格取得と、将来の就職や進学などの折り合いをきちんと自分なりに考えて…時には「退学して、新たな夢に向かう」という学生もいます。

その一方で、実際に勉強し、実習にも行ってみて、「思っていたのとちょっと違う…」「私はこの仕事には就きたくないな…」ということに気づき、けれども別に他にしたいことも、目標もないという学生は、そこから先にどう歩いていけばいいのか、わからなくなってしまい、漠然とした不安と焦燥感がやってくるようです。そうして普段の学習や生活においても元気がなくなっていく学生を、今まで何度か見ました。

目標を失った直後は、どんな人でも落ち込むでしょう。しかし、そこからの浮き上がりがなかなかみられず、日々を呆然と過ごしていく時間が長い学生が一定数存在するように思います。

どうやって次の目標を見つけたらいいのか、これからどうなるかわからない、という場面に会った時、「まあでも、なんとかなるだろう、新しい事を探してみよう」といった可能性に向かって開かれていく感覚よりも、「もうだめだ、行き止まりになってその先何も見えない」という、息が詰まって中空を見つめているような印象を受けます。

世の中には、たくさんの道があるのに、それらが目に入らない、というよりは、足元の途切れた道をじっと見つめて動けなくなっているような、息苦しい時間を長く過ごしてしまうような感じです。

このような状態に陥る学生には様々な理由があるかと思いますが、私は「ぼんやりと過ごす時間が少ないから」、そして「ケアワーカーの専門学校・短期大学に入学した時点で、それ以外の将来像を描くチャンスが少なくなるから」ではないかと考えています。

なにせ、専門学校生や短期大学生は、おおむね2年間で資格取得に必要な科目を履修するために、月曜日から金曜日まで、ともすれば土曜日までも、みっちり授業が詰まっています。それぞれの授業では宿題も課されます。夏季・冬季の長期休暇には実習が行われ、海外旅行や長期のボランティア活動などに参加することはなかなか難しいかと思われまます。これに加えて、経済的に苦しい家庭の学生は、学校が終われば

すぐさまアルバイトに向かいます。大学全入時代といわれるこの時代に、あえて2年制の短大や専門学校に入学しようという学生の中には、「4年制大学の半分の2年間で、社会で使える資格が手に入って、また学費も安く済み、早く社会に出て働けるようになるから」という経済的理由を挙げる学生が一定数います。そのような学生たちは、必死にアルバイトをしています。遊ぶお金、というよりは、生活に密着した費用を稼ぎ出すために必死です。

忙しいと、周囲が見えなくなります。目の前の課題をこなしていく事に精いっぱい、「ぼんやりと考える」とか「新たな経験を探しに行く」といった余裕のある視点を得ることが難しくなるかと思われまます。

そんな生活の中で、その学生の目に耳に入ってくる将来についての情報は、ほぼ専門職に関する物ばかり。

忙しさから社会経験が少なくなり、社会経験の少なさから想像力が育ちにくくなり、想像力を働かせる機会自体が少ないことから、とにかく目の前にあるものにたどり着こうとする。そのため、目の前に確固としてあった「保育士」「介護福祉士」という目標がなくなると、いきなり何をどうすればいいかわからない、という流れが生まれているように思います。結果的に、介護福祉士や保育士養成の短期大学や専門学校の学生の一部は、自分の将来に対して極端に矮小化したイメージを持ってしまいます。

これは保育や介護の業界だけなのでしょうか。他の専門職を養成する短期大学や専門学校も同じような状況なのでしょうか。残念ながら、そこまではちょっとわかりません。

様々な「働き方」モデル

このように元気がなくなってしまう学生に対して、「身の回りに多様な働き方をした成長モデル」があると、少しは不安や焦燥感が少しは軽減されるのではないかと、少なくとも「他の道はない」などとは考えないのではないかと、思うのです。

では、そのようなモデルになる人が、学生の身の回りにいるのでしょうか。

私は、養成校の専任教員こそ、そのようなモデルになれるのではないかと考えています。

保育士養成校教員という職業

例えば、保育士養成校の場合。

実は、保育士養成校の専任教員の保育士資格取得率はそれほど高くありません。

2017年2月の調査で、保育士指定養成施設の専任教員のうち、保育士資格所有者は、大学では15.3%、短期大学は18.4%、専修学校は29.8%となっています。なんと卒業生の9割近くが保育士として就職する専門学校や短期大学でも、教員の保育士資格所有者率は3割に満たず、保育士が保育士養成をするという構造にはなっていないのです。

ではどのような人が保育士養成校の専任教員をしているかという点、それはもう様々な専門家がそろっています。

保育士になるためには、音楽、図工、体育、教育、社会福祉、心理学、保健、栄養管理等、様々な専門分野を勉強する必要があります。それぞれの専門性が高い教員を

集めると、心理学の事はやはり心理学の専門家に、体育の事は体育の専門家に、音楽は音大出身の専門家に…と、教員はその分野の専門家が集められます。わらべ歌について研究している人、発達心理を研究している人、思春期の葛藤について研究している人（保育士の対象は未就学児だけでなく“18歳までの子ども全て”ですから、思春期についての学習もします）、子どもの福祉制度について研究している人、子どもの食生活について研究している人、人間の生活環境について研究している人……。

各々、その専門性を持って、今現在はたまたま保育士養成に関わっている、という状態です。（ただし「実習指導」という実習の事前事後指導をする授業については、多くの学校で保育士資格保持者、かつ保育現場経験者が担当しているように見受けられます。）

保育士資格も持っていない、保育の現場経験もない、でも保育士養成をしているという養成校教員は、「保育士養成」を通じて、何を成したいと思っているのでしょうか。専門学校や短大、大学で、研究をする手段でしょうか。それとも日々の生活の糧を得る為に、この仕事をしているだけなのでしょうか。

なぜ、

「保育士養成校教員」をしているの？

私と同じように、保育士養成をしている人たちは、どう思っているんだろう。そう思って、「なぜ、保育士養成をしているのですか、保育士養成をするやりがいて何です

か」と、何人かに聞いてみました。

「心理を専攻していたから、そのなりゆきで。研究も出来るし。」

「うーん、なんとなく。他にしたい仕事が無かったから。」

「大学院時代の講師アルバイトからの流れで、この仕事をするようになって…。」

「保育の現場にもちょっと出たけれど、お手伝いでやった養成の仕事の方が肌にあったみたい。」

「子どもの行動と心に直接働きかける仕事をしていただけで、途中で、教員をしたら一人一人に直接働きかけるよりも、たくさんの子どもに働きかけることが出来るなあって気付いたから。」

「私が子どもにとって大切、って学生に伝えたことを、卒業後学生が現場で伝えてくれたら、結果的に多くの家庭に届くでしょ？」

「実際に卒業後、現場で学生が頑張っている姿を見ると、すごく嬉しい。」

「日々の授業でも、自分にはない視点を学生が提示して来ると、面白いなあと思うし…」

「あと、卒業式！この日のために、1年間頑張ったよなーって思う！」

つまり、保育士養成校の専任教員は「保育士養成校の教員になろう」と思って、キャリアをスタートさせた人はまずいないようなのです。少なくとも私がお話を伺った方々はそうでした。皆それぞれの専門性に基づいた研究や実践を積み重ねる中、たまたま保育士養成に関わる機会があり、気が付けば保育士養成をしている、という教員が多いようです。そして、もともとやりたいと思っていた仕事ではないけれど、日々

の仕事の中で確実に面白い事や楽しい事、やりがいを見つけているようでした。

お話を聴くうちに、そういえば私も、福祉系対人援助職養成、などという事を、初めからしたいと思っていたわけではなかったなあ、と思い出しました。

私の場合は、子どもが好きだ、というシンプルな出発点があったのでした。一人でも多くの子どもと家族が笑って暮らせる日々をすごせるようにするにはどうしたらいいか、と考え、一度は現場に出ましたが、自分に出来る可能性と限界を感じ、いったんは挫折し、社会福祉分野に背中を向けた事がありました。

しかしある時、対人援助職で生きていこう、とするよりも、対人援助職の養成という形なら、私も子どもと家族の幸せに貢献できるかもしれない、と思ったことがありました。

私自身も、ちゃんと挫折して、落ち込んで、前の見えない時期を過ごしていたのでした。

その経験を通じて、つくづく感じたのは、「職業というのは、目的ではなく、手段だ」という事でした。

何になりたいか、ではなく、 何を成し遂げたいか。

「職業というのは、目的ではなく、手段なんじゃないかな。その仕事を通じて、何をしたいと思うのか、どんな風に社会に貢献できるのか、それが仕事なんだと思うよ。だから、何になりたいというより、この社会で何を成し遂げたいか、ということをまずは考えるといいと思うよ。」

「何を成し遂げたいか、という事が目的だから、その手段である仕事は何でもいいんだと思うよ。」

時々学生に私が言う言葉です。

保育士養成校の教員ですから、卒業生が保育士になってくれるのは嬉しいことです。しかし、それよりも嬉しいのは、その学生が自分にとって充実した人生を生きられるようになることです。

前述したインタビューを踏まえると、保育士養成の教員には、このようなことを伝えられる人が多いのではないかと思うのです。

なりたかった職業かどうかはともかく、 やりがいを持って働く人人

さらには、保育士養成校教員に限らず、そういうことが出来る人はいるかもしれない、という調査結果を見つけました。

東京大学社会科学研究所が 2005 年に 20 代から 40 代の、働いた経験がある人に行った調査によると、中 3 当時に希望していた職業に就いた事があるか、という質問に対し、「ない」と答えた人は約 75% でした。また、「子どもの頃に目指していた職業に就けたか」という質問に対しても、「いいえ」と答えた人は 80%、しかも「一旦は就いたけれどやめた」という人も 5.5% いました。

その一方、「仕事にやりがいを感じたことがあるか」という質問に対しては、84.2% の人が「はい」と答えていました。

つまり、今この国で働くほとんどの人は、自分が子どもの頃になりたかった仕事に就いていない、J-POP 風言えば「夢をあきらめて大人になっている」のですが、同時

にほとんどの人が自分の仕事にやりがいを感じて、いきいきと働いている、という結果が出ているのです。

「なりたい職業」があることは大変すてきなことです。子どものころになりたかった職業に就くというのは、嬉しいことです。しかし、「なりたい職業」にあまりこだわりすぎなくても、実はけっこうやりがいを感じながら仕事をするのは出来るようなのです。

保育士養成校教員に限らず、子どもや若者に、多様な将来選択の可能性を見せられる大人は、ほんとうは結構多いのではないかと思います。

将来に悩む若者や子どもに、大人が出来る一番身近な事、それは、

「社会人って、どんな仕事でも、結構楽しいし、やりがいあるんだよ」

と機嫌よく言える私でいることかな、と思っています。

「平成 28 年度指定保育士養成施設における 教育の質の確保と向上に関する調査研究」報告書（一般社団法人 全国保育士養成協議会）

「平成 29 年 3 月卒業生進路調査報告」（日本介護福祉士養成施設協会）

『夢があふれる社会に希望はあるか』 児美川孝一郎著 2016年4月 ベストセラーズ